

「愛媛県の樹園地整備について」

Outlook on Infrastructure Development of Citrus Orchards in Ehime Prefecture

○臼坂 浩二

Usuzaka Kouji

1. はじめに

愛媛県の柑橘農業は、温暖な気候と柑橘の生育に適した急傾斜地を利用して 44 年間にわたって日本一の生産量を維持してきた。加えて、品質の高さや多彩なオリジナル品種、周年供給体制などの特色は、市場や消費者からの高い評価と他産地を凌駕する収益力に繋がっているなど、本県が「柑橘王国」たる所以でもある。本稿では愛媛県の柑橘農業を支える樹園地の整備について、経緯や展望について紹介する。

2. これまでの樹園地整備

本県の樹園地は、15°以上の急傾斜地が 44%（全国 16%）を占めるなど、その多くが地形条件の悪い傾斜地にあり、日照条件に恵まれる一方で寡雨地帯にあることから水不足が長年の課題であった。

柑橘王国の屋台骨を担う南予地域においては、1967 年（S42）の大干ばつを契機に北は佐田岬から南は宇和島市にいたる約 7200ha の樹園地へ安定的に農業用水を供給するため、野村ダム（建設省施工：S56 完成）を水源として、国営南予用水農業水利事業（S49～H11）で総延長約 176km におよぶ幹支線水路が整備された。あわせて附帯県営事業等でスプリンクラーによる多目的自動化施設を整備したことによって、水不足を解消したことが転機となり、日本屈指の柑橘産地としての地位が確立された。

一方で、果樹は苗木を植栽して収穫できるまでに年数を要することから、樹木伐採を伴うほ場整備（区画整理）の機運は盛り上がり、これまでかんがい施設や農道を中心とした基盤整備を進めてきた。



スプリンクラー自動化施設の整備（八幡浜市）



農道の整備（八幡浜市）

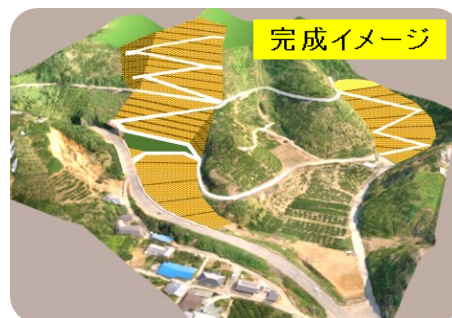
3. 西日本豪雨災害からの創造的復興の取組み状況

平成 30 年 7 月の西日本豪雨で樹園地の崩落などの甚大な被害が発生したことを受け、県では「西日本豪雨災害からの創造的復興」を最優先課題に掲げ、周辺の被災していない樹園地も含めて緩傾斜化を軸として大規模にほ場整備を行う「再編復旧」等に総力を挙げて取り組んでいる。

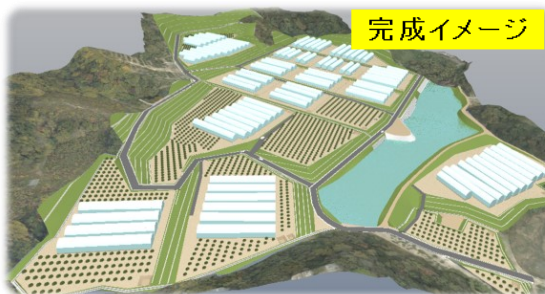
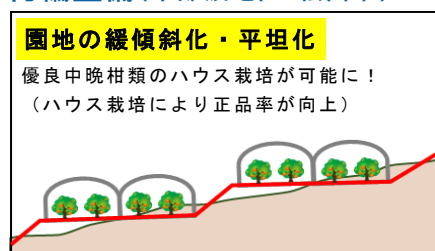
深刻な担い手不足や頻発・激甚化する自然災害など、柑橘産地を取り巻く環境が一層厳しさを増す中、将来にわたり産地を維持・発展させていくためには、災害に強く生産性が高い基盤づくりが不可欠であることから、現在、再編復旧 4 地区（A=30.7ha）のほか、被災園地以外で再編復旧と同様の手法により 6 地区（A=49.7ha）で再編整備

の取組みを進めている。

■ 再編復旧(玉津地区・宇和島市)



■ 再編整備(下難波地区・松山市)



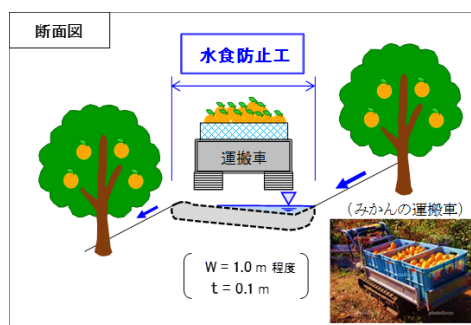
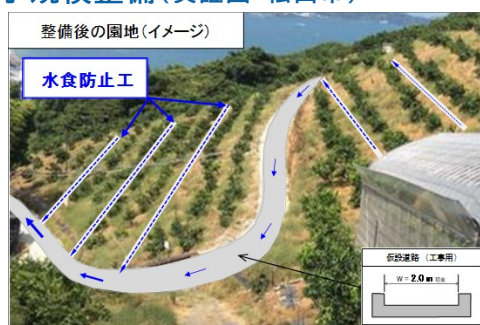
こうした取組みが進んだ背景には、農家の高齢化や減少、荒廃園地の増加等による産地の危機意識の高まりに加えて、高所得が望める県オリジナル品種の「紅まどんな」、「甘平」等の有望品種が定着してきたほか、平成30年度に農家負担を求めない農地中間管理機構関連農地整備事業が創設されたこと等から、意欲ある担い手やJAを中心に樹園地再編の機運が高まったことが挙げられる。

4. 今後の樹園地整備の展開方向

大規模に緩傾斜化等を行う再編復旧、再編整備は、生産面と防災面で絶大な効果が得られる一方で、多額の経費を要し、工事期間に加えて植栽から収穫再開までに未収益期間が発生すること等により合意形成が困難なことから、実施個所は限定される。

このため、小規模な地形改良で従来工法よりも安価で即効性の高い整備手法の確立に向け、現在、愛媛大学と連携して排水機能を併せ持つ園内作業道の実証試験に取り組んでいるところである。

■ 小規模整備(実証園・松山市)



今後は、再編整備を補完する小規模整備の導入や点滴灌水機能の追加など既存かんがい施設の高度利用なども積極的に推進し、意欲ある担い手の規模拡大や所得向上につながる樹園地再編の取組みを県内全域へ波及させ、本県柑橘農業の持続的な発展と次世代への継承に取り組むこととしている。

*愛媛県農林水産部農業振興局農地整備課(Farmland Development Division, Ehime Prefecture)

キーワード：農用地計画・整備、畑地灌漑、圃場整備